

【後期】相談 【講義と演習②】 地域を基盤とした相談支援のあり方

(事例シート1)

近隣住民による把握と初回訪問

公営住宅の団地に住む64歳の男性(本人)の事例である。1年前に同居していた母親が亡くなり、その後一人で暮らしていた。民生委員から自立支援相談機関に、本人の姿を見かけなくなったと連絡が入った。

相談支援員が民生委員と訪問してみると、本人は2か月前から目が見えにくくなり、最近の1週間は、何も食べていないという訴えがあった。食べるものへのこだわりが強く、決まったものしか食べない。医者にはかかっておらず、なぜ目が見えないのかが分からない。介護保険の申請を検討したが、年齢が現在64歳で、65歳の誕生日までまだ2か月あった。

家の中は、いわゆるごみ屋敷状態である。近隣住民は、本人のことを心配する一方で、「家からの悪臭や害虫を何とかしてほしい」と苦情も寄せてきた。近隣からの情報では、親族は隣町にいるものの疎遠になっていて関係も悪いとのことであった。

〈本事例の課題〉

- 最近の1週間、何も食べられていない
- 疎遠になっている身内へのアプローチ
- 医療受診
- 介護保険の申請とホームヘルパーの利用
- 手術に向けた入退院の支援(ショートステイの利用を含む)
- 近隣への説明
- 民生委員、校区福祉委員会、地域ボランティアに対する家の片付けの協力依頼
- ホームヘルパーの利用と地域の見守り
- 地域の見守り体制の強化

【後期】相談 【講義と演習②】 地域を基盤とした相談支援のあり方

(ワークシート1)

緊急性の高い状況下において、利用できる制度につなげられるまで、地域をどのように巻き込んでいきますか。

【後期】相談 【講義と演習②】 地域を基盤とした相談支援のあり方

(事例シート2)

その後の経過

本人と信頼関係を構築するため、買い物支援による危機介入を行った。自立相談支援機関、地域包括支援センター、民生委員でチームを編成した。親族にも協力を依頼した。支援のためのルールづくりを行い、目の手術までの間をサポートし、信頼関係をつくっていった。

本人の困りごとをサポートするために親族と連絡を取ったことで、その後の医療受診や病院での保証人、またごみ屋敷の片付けの立会いとして、親族がキーパーソンになっていった。

保健師の同行で眼科を受診したところ、白内障の手術を緊急に行う必要があると診断され、入院と退院の支援が必要となった。

本人は、何年間も入浴できておらず、家もごみ屋敷状態で、衛生面に心配があった。目が見えず、家の片づけもできないことから、手術を終えた退院時に家を片づけることにした。目の手術後、衛生状態が悪いと失明する可能性があると言われ、指示された。65歳になると同時にショートステイを利用し、視力の回復を待つ間に家の片づけを地域のボランティア、民生委員、ヘルパー事業所、地域包括支援センター、自立相談支援機関で行った。

退院後、家の中が片付き、ヘルパーの利用も始まった。同時に地域住民の見守りも始まった。さらに、団地の自治会で協議し、自治会の班長を「ご近所見守り協力員」と位置づけ、近隣の把握を行うとともに学習会を行い、見守りの体制づくりを行った。

【後期】相談 【講義と演習②】地域を基盤とした相談支援のあり方

(ワークシート2)

今後、地域でどのような取り組みが可能となると想定できますか。